

# 筆子・その愛—天使のピアノ—

2007(平成19)年1月19日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督・製作総指揮・脚本=山田火砂子/出演=常盤貴子/市川笑也/細見大輔/黒沢ともよ  
/渡辺梓/加藤剛/市原悦子(現代ぶろだくしょん配給/2006年日本映画/119分)

……筆子とは、かつてその美貌と知性で「鹿鳴館の華」と呼ばれた石井筆子のこと。「滝乃川学園」という日本最初の知的障害児施設を守り、「日本の障害児教育の母」と呼ばれた女性だが、一般的には津田塾大学を創設した津田梅子ほど有名でないはず……。伝記ものの映画特有の、少しかれいごとすぎる面はあるものの、知的障害・身体障害を問わず、ますます福祉を必要とする社会に向かっている今、この映画は福祉問題にまじめに向き合い勉強するきっかけになるのでは……？

## 長州藩だけではなく、大村藩にも……

長州藩だけではなく、大村藩にもすごい女性がいた……。

『長州ファイブ』(06年)では、志道聞多(井上馨)、伊藤俊輔(伊藤博文)を抜き(?)、後半の主人公を独占したのが、造船技術を学ぶとともに人材育成の重要性を説き、工部大学校(現在の東京大学工学部)の設立に尽力した松田龍平演ずる山尾庸三だった。さらにスコットランドで働いている聾啞者の姿を見て、手話を学んだこの山尾は、帰国後盲教育・聾教育の普及にも貢献したとのこと。

この長州藩士山尾の帰国は1868年、つまり明治元年だが、この『筆子・その愛』の冒頭シーンはそれと同じ1868年。1861年に長崎県大村藩士の娘として生まれた石井筆子(常盤貴子)が7歳の時だ。筆子はこの時、生涯筆子の女中として尽くす少女藤間サト(渡辺梓)と知り合うとともに、隠れキリシタンが弾圧される様子を目の当たりにすることに。その幼い時の原体験がその後の筆子の人生の方向性を決めることになろうとは……？

筆子の親友だった津田梅子は津田塾大学の創設者として有名だが、この石井筆子が「日本の障害児教育の母」と呼ばれる有名な女性だということは私は全然知らなかった……。

## ピアノをうまく小道具に……

この映画には『天使のピアノ』というサブタイトルがついているが、これはピアノをうまく小道具として使い、物語のつながりに役立てているため。このピアノは筆子が最初の夫である小鹿島果（細見大輔）と結婚する際にプレゼントされた立派なもの……。

筆子が死亡したのは、太平洋戦争末期の1943年（82歳）。再婚した夫石井亮一（市川笑也）が創設した知的障害児施設である「滝乃川学園」を、夫死亡後引き継ぎ、物資不足に悩まされながら何とか維持していた筆子は、津田塾大学を創設した津田梅子の親友。そこで今日は、津田塾大学の資料館建設にあたって、教授たちが筆子のかつての姿をたどってきたわけだが、そこで出会ったのが、今は音の出なくなったこのピアノ。修理すればすばらしい音が出るはずだと教授が直感したそのピアノは、物語の中で再三登場するとともに、フィナーレのシーンでも重要な役割を果たしている。さて、修理を終えたピアノからはどんな音色が……？

「伝記モノ映画」においてはよく使われる手法だが、それがこの映画では実にピッタリ……。

## 「鹿鳴館の華」だが、いいことばかりでは……？

筆子の父渡邊清（加藤剛）は、幕末期の働きによって爵位を授けられたほどだから、筆子は何不自由なく、「お嬢さま」として育てられたよう。また、生まれながらの美貌に恵まれた筆子は、フランス留学をさせてもらったから、英語・フランス語がペラペラという才女に成長。そんな筆子だから、友人たちも才女ぞろい……。このように、洋行帰りでまさに才色兼備の筆子は、東京の鹿鳴館でモテモテで、「鹿鳴館の華」と呼ばれていたらしい。もっとも、筆子は当時既に結婚していたため、浮いた話は全くなかったよう……。映画で観る限り、夫の小鹿島果は真面目でやさしく、何1つ不満のない男性だったよう。そんな2人の間に長

女幸子（黒沢ともよ）が生まれ、筆子の人生はまさに順風満帆……？

しかし、人間いいことばかりではない。よその子供よりも少し言葉が遅いと心配していた長女幸子は知的障害を持っていることが明らかに。さらに、次女は生まれてすぐに亡くなり、三女は結核性脳膜炎になったうえ、夫も結核によって若くして死亡してしまったから大変。これによって、筆子は子供を連れたまま嫁ぎ先に別れを告げ、以降渡邊筆子として生きていくことに。もっとも、筆子は既に教育者としてのすばらしい実績があったから、生活するうえで困ることは何もなかったが……。

## 石井亮一を市川笑也が……

明治・大正の時代、知的障害児とその家族がおかれていた状況は、想像以上に過酷なもの……。この映画を監督した山田火砂子は、チラシの中にある「あいさつ文」の中で、「現在43歳になる重度知的障害の娘を持つ母」と自己紹介している。そして続いて、「娘が産まれたころには社会福祉などという言葉さえなく、まったく差別の時代でした。その頃は新聞に毎日のように親子心中という障害の子供を持った母と子が亡くなったという記事が出ていました。明治・大正時代はもっと酷かったと思います」と書いている。

そんな状況下、寄付金を募り、私財を投げうって知的障害児施設「滝乃川学園」を創設し、生涯、知的障害児教育に使命感を燃やし続けた石井亮一という人物はすごいもの……。そんな信念の人石井亮一を演ずるのは、スーパー歌舞伎を創造した市川猿之助門下の二代目市川笑也。彼の『ヤマトタケル』や『新・三国志』での熱演ぶりは私もよく知っているが、映画出演はこれが初。市川染五郎は『蝉しぐれ』（05年）や『阿修羅城の瞳』（05年）で素晴らしい演技を披露していたが、さて笑也は……？ 多少ぎこちない演技（？）やちょっと重いセリフ回し（？）が、生真面目で一本気な石井亮一役にピッタリ……？

## 幸子役は大変……

この映画で、難しいのは筆子の長女幸子役。彼女は他の知的障害児たちと違ってセリフが多いから、その役を演ずるのは大変……。障害者役の演技で私がビッ

クリしたのは、韓国映画『オアシス』(02年)。全編顔をゆがめ、全身をこわばらせながら重度脳性麻痺のハン・コンジュ役を演じた女優ムン・ソリの演技はすばらしかった(『シネマルーム7』177頁参照)。さらに、若き日の<sup>アン・ソンギ</sup>安聖基が身体障害者のピョント役を演じた『神さまこんにちは』(87年)(『シネマルーム2』232頁参照)もすごかった。

もっとも、これくらいの演技派俳優ともなれば、自由にホンモノそっくりの障害者を演じることができるかもしれないが、子役では果たしてどこまで知的障害者になり切った演技が……？

## ホントの主役は知的障害児たち……

この映画は石井筆子の生涯を描く伝記モノだから当然筆子が主人公だが、実はホントの主役は、スクリーン上に登場するたくさんの知的障害児たち……？ 前述のように、健常者が知的障害者を演ずるのは結構難しいもの。しかしそうかといって、ホンモノの知的障害児を重要な役に抜擢した場合、要求されるレベルの演技ができるかどうか心配……？

この映画にはホンモノの知的障害児が多数出演していることはすぐにわかるから、彼ら彼女らに対する山田火砂子監督の演技指導は大変だったはず……。

知的障害児をありのままの姿で映画に出演させるのは、場合によれば「差別を助長するものだ！」というクレームが出るかもしれない……？ しかし現実はその逆で、この映画にはたくさんの知的障害児が積極的に出演しているだけでなく、たくさんの知的障害児施設や団体が後援している。ちなみに、山田火砂子監督の娘さんもワンカットながら出演しているらしいので、それにも注目を……。

## 少しキレイ事すぎるかも……？

山田火砂子監督自身がプレスシートの中で、「よく福祉映画はつまらないから見たくないという声を聞きます」と書いているが、それは、福祉映画で伝記映画ともなると、善人ばかりが登場し、万人に教訓を垂れるような平凡な映画になる可能性が高いから……？ 山田監督がそうならないよう十分配慮していることはよくわかるが、それでも私には全体を通じて少しキレイ事すぎるのではという感が……。

そういう視点からは、知的障害を持つ幸子の育て方をめぐる筆子と夫との葛藤や、滝乃川学園の資金をめぐる筆子と夫とのケンカの姿なども少しは描いてほしかった……？ また、その生涯を通じて心から筆子に仕える女中のサトは立派だが、いくらそうであっても、たまにはトコトン言い争った経験もあるはず……？ さらに、伝染病の発生や火事の発生という事態は、滝乃川学園の存亡の危機を招いたはずだから、それをめぐる複雑な政治的折衝などもあったのでは……？

石井亮一が生真面目で一本気な性格であることはわかるが、それだけで社会的偏見が強いあの明治・大正時代に、これだけの施設を維持し続けるのは難しいのでは……？ そういうさまざまな人間の欲を絡めたウラの物語も少しは描いてほしいと思ったのは私だけ……？ もっともそんな私でも、単純に涙を流したのは、1度ならず2度、3度……。

## 『筆子・その愛—天使のピアノ—』と『赤い月』とどちらに軍配を……？

常盤貴子は映画・テレビ・舞台・CMなどで広く活躍しているトップ女優の1人。といっても私が思うに、彼女は正統派美人女優ではなく、ちょっと個性的なところが持ち味の女優(?)だから、『ゲロッパ!』(03年)は最高に面白かった。そんな彼女の代表作は『赤い月』(03年)。満州の地にしっかりと根をはって生きていく「恋多き女」森田波子は、『風と共に去りぬ』(39年)のスカーレット・オハラと同じような波瀾万丈の人生を歩むが、そんな人間味豊かで、スケール感のある演技を常盤貴子は実に堂々とこなしていた(『シネマルーム3』179頁参照)。

それに比べれば、この『筆子・その愛—天使のピアノ—』は実在の人物の伝記物で、ただひたすら真面目に障害児教育のために尽くす筆子の姿を描くものだから、波乱に乏しい感が……。そのうえ、「奔放な女」を演じさせればピカールの常盤貴子(?)を十分に活かせていないのが残念……。

両作品とも女のシンの強さを描いているが、筆子のそれと波子のそれは全く異質のもの……。そして、常盤貴子の良さをホントに表現できるのは、どちらかというとう等生の筆子ではなく、自由奔放で恋多き女、波子の方……？ さてあなたは、『筆子・その愛—天使のピアノ—』と『赤い月』のどちらに軍配を……？

2007(平成19)年1月24日記